

万葉集に、「荻・をぎ」が詠まれている歌は3首しかありません。しかし、「歌」はいずれも興味あるもので、当時「荻」は、人々に馴染みのある草であったと思われます。

荻は、イネ科ススキ属の植物で、ススキの仲間ですが、地下茎で広がるため株立ちしない点、乾燥地ではなく湿地に群生する点が、ススキとは異なります。

万葉時代の人々が、荻とススキを区別していたかどうかは、万葉の歌からは分かりません。しかし、ススキは、「尾花」とも呼ばれ、歌は48首もあることを考えると、その中には荻が含まれていたと思われます。「尾花」は、“花穂が馬の尾に似ている”とする呼び名であるので、「荻の花穂」を含めて、「尾花」と称したと思われるからです。

また、荻は、同じように湿地に生える「葦・アシ、後にヨシ」(イネ科ヨシ属・背が高い)と特に葉がよく似ています。葦は、46首も詠まれており、この中にも、実際は荻であったものが含まれていたとも思われます。(但し、荻は干潟には生えない。)

荻が詠まれた歌3首について、葦と区別していたかどうかについても、見ると、

① 「神風かむかぜの 伊勢の浜荻はまをぎ 折り伏せて

旅寝やすらむ 荒き浜辺に」 (巻4-500番)

(神風が吹く枕詞 伊勢、その浜辺の荻を刈り採って、あの人は今頃旅寝をしていることであろう。あの海風の荒い浜辺で。) 作者は、碁壇越ごのだんおちの妻と記されるが、不詳。

伊勢国へ旅する夫を気遣う妻の歌。巻四の「相聞」にある。「新古今和歌集」にも。

○旅寝する時は、荻又は葦を、山野ではススキを刈り取って、仮の屋根や敷物に用いたと言われる。ここでは、葦には触れていない。

② 「葦辺あしへなる 荻の葉さやぎ 秋風の

吹き来るなべに 雁かり鳴き渡る」 (巻10-2134番)

(葦の茂る水辺、そこに生えている荻の葉がさやさやとそよぎ、秋の風が吹いてくる折しも、雁が鳴き渡っていく。)巻十の「秋雑歌」『雁を詠む』の中の一首。

次に続く歌から見て、難波の堀江で詠まれたと見える。作者不明。

○“堀江の葦、その辺りに生える荻”と言い、荻を、葦と区別して認識していると思われる。但し、当時、堀江の岸边には葦が群生しており、そこに荻が混じって生えることは考え難い。歌として、秋風には“荻の葉音”の方が相応しく語調も良いと考えてのことか。“葦も荻も同じような草”だから、と思っていたとも見える。

③ 「妹いもなろが 付っかふ川津の ささら萩

葦あし と 人言ひとごと 語りよらしも」 (巻14-3446番)  
(あの娘がいつも居て仕事している川の渡し場、そこに生えているささら萩(細い萩・可愛い萩、この詞は共寝を意味するか)、だのに世間の連中は「葦だ、悪し草だ」と噂してるんだよ。)巻十四・東歌 国土不明歌の中の「雑歌」にある。

○「萩」は、「葦」とも呼ぶ、と思っている。従い「葦、悪し」と同音で繋がるから、悪むるい「人言(世間の噂)」に掛けている。 萩と葦を同類の草と認識している。

(尚、「葦」は、奈良時代までは、「アシ」と発音していたが、平安時代以降、「アシ」は「悪し」を連想させるのでよくないとされて「ヨシ」とも、発音するようになったと言う。)

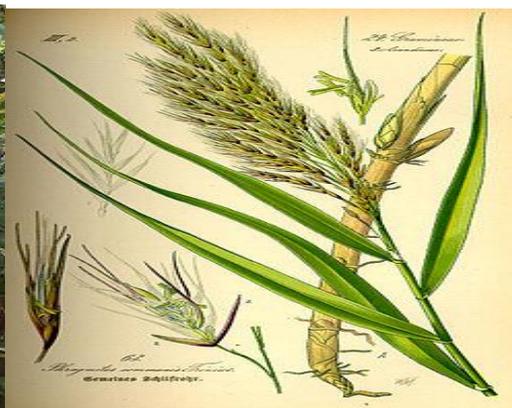
萩と葦は、区別しているかに見える歌(②) がある一方、明らかに同類の草と見ている歌(③) があります。「葦の葉」(3570番)、「葦の根」(1324番)と詠んだ歌などは、実際は、「萩の葉や根」であったかも知れないと思いました。

「日本国」の美称として今も使われる詞「葦原中つ国あしはらのなかつくに」「豊葦原瑞穂国とよあしはらのみずほのくに」(古事記 日本書紀、万葉集にも)は、神の国「高天原たかまのはら」に対して、地上の国をそのように称したのですが、「葦・アシの生い茂る湿原」が、古来この国の最も特徴的な景観であったことを伺わせます。

万葉の時代、干潟には葦が、河川や湖の岸辺・沼や湿原のいたるところに、葦の群生と、萩の群生が、見られたと想像されます。人々は、そんな自然を愛しながらも、草々の名前と区別には拘こたわず、むしろ、そこに生きる草々の風情に感動したからこそ、自らの気持ちを重ねて「歌」に詠み込んだものと思います。



萩 ヲギ→オギ(イネ科ススキ属)



葦 アシ→ヨシ(イネ科ヨシ属) Wikipedia

その後、

「伊勢の浜萩」と詠った①の歌は、名歌として平安時代にも親しまれたのですが、万葉

時代から凡そ 700 年の時を経て、その趣意を変えて、次のような「諺ことわざ」に引用されることとなります。

「難波の葦は、伊勢の浜荻」と言い、“物の呼び名や風俗・習慣は所によって違う”ということの喩たとえとしての諺が生まれたのです。

これは、“「浜荻」は荻ではなく、実は葦のことだ”と見るものでもあります。

そこで、万葉の歌の趣意が、このような「諺」へと変化する過程を考えて見ました。

「神風の伊勢の浜荻折り伏せて 旅寝やすらむ荒き浜辺に」（巻4・「相聞」）

一般に“荻は河川敷の湿地に生え、浜辺に生えることは無い”と言われていますが、この歌の「浜荻」は、「浜の辺りに生える荻」と言う意味で使われた詞であると思います。作者は、「伊勢の浜荻」と言い、“伊勢湾に注ぐ川の、河口近くの川岸に生えている（であろう）荻”を想像し、“あの人が旅寝の床に敷くには、葦よりも柔らかく刈り取りもし易い荻が生えていればいいのだが”と、旅に出た夫を気遣った。その心情を表す言葉が「浜荻」であった、と思います。（歌を、官人・男性の代作と見る説もあるが、“留守居の人の思い“に変わりはない。）

平安時代、「古今和歌集」（905 年）が編纂される頃には、「万葉集」は既に訓読されており、和歌が盛んになるに連れて、万葉の歌は、多くの歌人に影響を与えます。

平安後期、「本歌取り」の作歌技法が盛んになると、この「万葉の伊勢の浜荻」を本歌とする歌が、多く詠まれるようになります。（この時期の主な和歌集に 10 首程見られる。）

「あたら夜を伊勢の浜荻をりしきて 妹恋しらに見つる月かな」

（あたら夜＝明けるのが惜しい夜）（藤原基俊、「千載和歌集」）

「しらざりし八十瀬の浪を分け過ぎて かたしくものは伊勢の浜荻」

（八十瀬＝鈴鹿川かたしく＝独り寝の意）（宣秋門院丹後、「新古今和歌集」）

「潮たるる海女の苫屋も風さえて 枯れ葉も寒し伊勢の浜荻」

（信覚、「後鳥羽院御集」）

などの歌があります。

ここでは、「伊勢の浜荻」は観念的な歌詞となり、「浜荻」は“伊勢の風景と旅情に趣を添える草”と見られ、いわば象徴的意味を持つ言葉へと変化しています。

そして、鎌倉時代初期、勅撰集・「新古今和歌集」（1210 年）は、平安期の多くの和歌とともに、万葉の歌の中から秀歌と見た 62 首の歌を選びました。当然のこと、「万葉の伊勢の浜荻」（「相聞」の歌）も選ばれましたが、「旅の歌（羈旅歌）」「詠み人知らず」として掲載されました。

その後、万葉集の色々な伝本が僧・仙覚によって集大成されて、「万葉集註釈」（「仙覚抄」1269 年）が完成します。そこにおいて、「伊勢国には、葦を浜荻といふなり」と歌に注記が付けられます。仙覚は、「平安後期の伊勢の浜荻」の歌に影響を受け、また、“荻は、浜辺では目にし無い”ことから推して、このように記したと思われます。

(「浜菝」は伊勢の方言である、と、調査の結果を記したものとは思えない。) 丁度この頃、連歌が興ります。連歌は、和歌の強い影響を受けて成立したものです。連歌師は、多人数で歌を連ねる連歌の座を差配し、歌全体をまとめなければなりません。そのためには、「新古今和歌集」は当然のこと、「万葉集」をはじめ「古今和歌集」や「源氏物語、の歌」なども含め、古典の知識は不可欠であったのです。連歌師たちは、万葉の歌については、「仙覚抄」を基にして学んでいたと言われます。南北朝時代、連歌が和歌から独立した詩形として確立した時期、連歌撰集・「菟玖波集つくばしゅう」(1356年)が編纂されます。そこに現れたのが、『草の名も所によりてかはるなり 難波の葦は伊勢の浜菝』の歌です。連歌師・救済ぐさい/きゆうせいが詠んだものです。

ここで新たに提示された「難波の葦」については、平安時代の和歌には数え切れない程多く見られます。(万葉集には6首程あり、“菝と葦が共存する”歌もある。先述②の歌)

「おしける難波堀江の葦辺には 雁寝たるかも霜の降らくも」

(万葉集 巻10-2135 番歌)

「津の国の難波の葦の芽もはるに しげき我が恋 ひと知るらめや」

(「古今和歌集」紀貫之)

「難波潟 短き葦のふしの間も 逢はでこの世を過ぐしてよとや」

(「新古今和歌集」「小倉百人一首」女流歌人・伊勢)

救済は、過去に詠まれた「難波、葦」「伊勢、浜菝」の多くの歌を学び、「仙覚抄」における「注記」も、目にした、その結果次のような見解に至ったのだと思います。

“難波の風景を見る時は葦”と言い、“伊勢の旅では浜菝”と言い、昔から、「葦」と「浜菝」は、それぞれの土地の象徴的景物として歌材に用いる「草」なのだ、と見たのです。そこで、少し皮肉を込めて提示したのが、先の『歌』であったと思います。

室町時代、戦国時代、多くの人々が各国を行き来するようになると、国よって同じ物でも呼び名が異ったり、同じ呼び名の物でも実質が異ったりするを経験します。

やがて、連歌の隆盛に伴って、この『歌』が、諺になったものと考えました。

(江戸時代初期、庶民向けに出版された「仮名草子」には、既に、「諺」として記されている。)



伊勢本街道・ココログより

難波潟——大和——伊勢の海